

作品について／イスラエルでの反応：

パレスチナの「ナクバの日」【訳者註：1948年のイスラエル建国の日であると同時に、多くのパレスチナ人が虐殺・追放された日。大災厄・大惨事を意味する】やパレスチナ人住居の計画的破壊についての演劇作品をイスラエルで発表することはタブーを冒し、非常に根深い抑圧・否定に支配された社会に疑問を投げかけることを意味する。それを考えると『パレスチナ、イヤーゼロ』の報道がイスラエル文化省トップからよく思われなかったのは当然のことだろう。

作品は、パレスチナ人の住宅被害状況を調査する古い建物の鑑定士を追う。彼が都市から都市へ、地区から地区へと移動しながら記録していく住宅、そしてかつてそこに住んでいた家族の物語は、パレスチナ人の悲劇の歴史や今日も続く厳しい現実を浮き彫りにする。鑑定士は、地下で行われている「ダビデの町」【訳者註：パレスチナ地方エルサレム旧市街地の南側に位置する都市遺跡。ダビデ王が築いた王国の首都があった場所だとされている】の発掘調査が原因で崩落した住宅が並ぶスィルワーンから、侵攻したイスラエル軍が住宅の壁を爆破し通過していった痕が残るジェニン難民キャンプ、空爆で壊滅したガザの家々、そして100回以上に渡り破壊されてきたアラキーブの住宅街に加え、その他「行政的」措置や制裁を理由に取り壊された住宅を巡る。

アッコ・フリンジ・シアター・フェスティバルでの初演まで約2週間という時、作品が国を中傷し、その象徴を揶揄する扇動的な内容を含むとする抗議がミリ・レゲヴ文化・スポーツ大臣に提出された。申し立ては、作品の概要と後援者リストにイスラエル系非政府組織——これらの団体は、イスラエル国家の政策によって権利を迫害されてきたパレスチナ人の援助を目的とする——が含まれていたことのみを根拠を置くものだった。これを受け、大臣は文化省で作品の取り調べを行い、代表者が稽古を視察するという声明を発表。この声明後間もなくしてフェスティバル参加者全員が連帯し、『パレスチナ、イヤーゼロ』の公演が中止されれば、自分達のフェスティバルの公演も放棄すると発表した。また、文化省の代表者による稽古視察に対しても、断固拒否の姿勢が示された。一方、フェスティバルの主権者側は「何も隠すことはない」とし、文化省に作品の脚本を提出。これがある意味不幸な決断となった。省庁は作品の内容を事前検閲する法的権限がないため、これによって不幸な前例が作られてしまったかもしれないのだ。

省庁には公演を中止する権限がなく、それでも圧力をかけようものなら参加者全員がフェスティバルでの公演を取り止め、イベント全体が中止となることを伝えられた大臣は、省庁の取り調べの結果、作品は国を中傷しその象徴を揶揄するような内容を含んでいないとし、抗議を取り下げた。結果レゲヴの介入は、1948年から始まったパレスチナ人の悲劇を堂々と扱う作品に皮肉にも省庁がお墨付きを与えるという考えられない自体をもたらした。強硬派のイスラエル文化・スポーツ大臣の正式承認を得て、何千戸に上るパレスチナ人住居の破壊、そしてパレスチナという祖国の破壊に繋がった抑圧の真相を公のステージで公開することが許されたのだ。